

保育者養成校における学生のピアノに関する意識調査

A Survey on Students' Attitudes towards Piano in the Training School for Early Childhood Education and Childcare

中 村 礼 香
Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

保育者養成校では保育・教育現場から期待されるピアノの技術を2年、もしくは4年で学生に身に付けさせるために、ピアノレッスンの在り方の検討を常に行っている。しかし、まず学生がピアノに対して必要性を感じていなければ、教員側が一方的にピアノの練習を強制しても苦手意識が強くなってしまい、よりピアノに嫌悪感を抱く可能性がある。そこで本研究では全ての実習を終えた2年生に、保育現場におけるピアノの必要性に対する意識調査を行った。その結果ほぼ全員が保育においてピアノは必要であると感じていた。特に弾き歌いの習得に対する意識が高く、練習の必要性も感じているが、ピアノ練習を計画的に進めることが苦手な学生が多い。そこでアクティブ・ラーニングの一環として、学生が自らピアノ練習計画を立て、課題に取り組む方法を模索した。

キーワード：ピアノレッスン、授業、弾き歌い、アクティブ・ラーニング

1. はじめに

本稿では、学生が実習を通して見つけた音楽活動に対する課題、その中でも特にピアノに対する課題を抽出し、今後の音楽にかかわる授業の内容、レッスンの進め方を検討していく。

幼稚園教育要領において音楽にかかわる内容を抜粋すると、「第2章 ねらい及び内容」の「表現」の内容として「(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」とある。幼保連携型認定こども園教育・保育要領も同様である。また、保育所保育指針には前述の内容に加え、「②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。」とある。このように、音楽活動を保育において行うことは大切なことである。特に子どもにとって日々の歌唱活動は欠かせない。生活の歌、季節の歌を始めとする幼児曲を毎日歌う園は多い。その際に必要となるのがピアノである。子どもたちが歌を歌う補助としてピアノを使用することが多いと筆者は考えている。また、リトミックなどの表現活動や発表会、卒園式などピアノは様々な場面で必要となる。そして、小学校教諭を目指すにしても臨時的採用教員になる際に本学の卒業生は毎年数名が音楽の専科教員として採用されており、音楽は教育・保育に携わる仕事を目指す学生にとって不可欠な科目となっている。しかし、ピアノを習得することが出来ずに卒業してしまう学生も少なくなく、こういった学生は本来楽しいはずの音楽活動を苦痛と感じているのではないかと考えると残念である。この研究では、学生たちが実習を通して音楽活動に対

しどのような意識を持ったのかを調査した上で、授業及びピアノレッスンの在り方を検討したい。

2. 保育現場におけるピアノ導入の歴史

そもそも保育・教育現場でピアノが過剰に必要とされているのではないかと感じることもある。保育者にとってピアノだけが全てではないはずなのに、就職試験ではピアノの実技試験を行うところが多く、現場に入ってからでもピアノが弾ける方が望ましい。どちらかという保育所より幼稚園においてピアノの能力を求められるため、ピアノが苦手だからという理由で幼稚園の就職を諦める学生も出ている。また、ピアノが苦手な保育者は就職した後もピアノの練習に時間を取られることになる。そのような学生や卒業生のピアノに対する問題を少しでも解消すべく、保育者養成校ではピアノ指導に力を入れなければならない。

元来なぜ幼稚園や保育所でピアノが必要とされるようになったのであろうか。ピアノが保育に導入された経緯について調べた。西海(2015)の調査によると、幼児教育の場にピアノが初めて導入されたのは明治9(1876)年であった。東京女子師範学校附属幼稚園の開園当初からピアノが設置されていたと考えられている。ドイツ人保母の松野クララが東京女子師範学校附属幼稚園で明治10(1877)年に保育唱歌の伴奏と幼児の行進のためにピアノを用いたことが、保育におけるピアノの初めての使用だったようである。その後明治13(1880)年にルーサー・ホワイトニング・メーソン(Luther Whiting Mason,1818-1896)が音楽取調掛として招聘された。メーソンは唱歌教育を普及させるために

は、楽器の普及が不可欠であるとし、幼稚園に楽器を備えて幼児の唱歌に合わせることが必要であることを主張している。そして明治32(1899)年制定の「幼稚園保育及設備規程」において、幼稚園に楽器を備品として設置することが挙げられ、ピアノを保育現場に設置することに繋がったということであった。

3. 保育者養成校におけるピアノ指導の課題

安田・長尾(2010)は、1950年から1999年に保育とピアノに関して書かれた論文107本について分析統計し、保育者養成機関でのピアノ学習について音楽教員が抱えている問題点をまとめた。その結果、「保育現場からあがってくる過大と言っているピアノ演奏技術への要求にピアノ指導が追いついていかない結果として、目先の対応に追われ、教材の選択、指導法、学習効果に絶えず疑問を抱いている。」¹⁾と述べている。

また、宮脇(2001)は全国の保育者養成校に調査を行い、ピアノ指導に関する問題点について質問している。その回答として「保育者としてのレパートリー作りと指導内容、方法に時間をかける必要が増え、ピアノの基礎指導のための時間が足りない」「学生の意欲の低下、練習不足が目につく」「養成校におけるピアノ指導にはどの程度時間を割くべきか、あるいはどの様な教材を中心にどの程度まで指導すべきか根本的に悩む」²⁾といった悩みが挙げられている。このように保育・教育現場から求められるピアノ技術に対応すべく、どの大学でも日々検討を重ねていることが分かる。

筆者も同じような悩みがあるが、特に学生たちの練習への取り組みの姿勢に対していつも悩まされている。今回は学生が音楽の授業、特にピアノに対しどのような意識を持っているかを知った上で、問題解決をしたいと考える。

4. 質問紙調査概要

4-1 調査方法と内容

調査期間	平成28年10月11日～10月17日
調査対象	K短期大学 平成28年度後期 保育内容(表現Ⅲ) 受講者251名
回答者数	208名(回収率82.9%)
調査項目	以下の各調査項目において、筆者が設定した小項目の当てはまるものに丸を付けるように指示した。小項目の詳細は別表に記載している。

《短期大学入学前のピアノ経験》《保育・教育現場におけるピアノの必要性》《実習で音楽活動を行うに当たって困ったこと、反省したこと》《授業で役に立った内容》《保育・教育現場で音楽活動をするために必要な音楽的技術》《今

後学びたいこと》《2年間のピアノレッスン課題曲の量》

4-2 結果及び考察

(1) 短期大学入学前のピアノ経験

短大への入学前のピアノ経験が全くない学生は208名中72名(34.6%)、1年未満が23名(11.1%)、1年以上3年未満が21名(10.1%)、3年以上5年未満が19名(9.1%)、5年以上7年未満が28名(13.5%)、7年以上10年未満が22名(10.6%)、10年以上が22名(10.6%)、無回答が1名(0.5%)であった(図1)。この結果から分かるように、全くの初心者が3分の1を占め、ピアノの経験が3年未満の学生も合わせると半数以上を占めている。宮脇(2001)が平成12年に全国の保育者を養成している4年制大学と短期大学に質問紙調査を行った際に、4年制大学では入学前にピアノ経験のない学生が37.6%、短期大学では31.8%、5年以上の経験者が4年制大学で26.9%、短期大学で23.5%という結果が出ている。本学の初心者の比率は他大学とあまり変わらないが、5年以上の経験者が平均以上の34.6%おり、他大学に比べると比較的指導が行いやすいほうなのではないかと感じた。

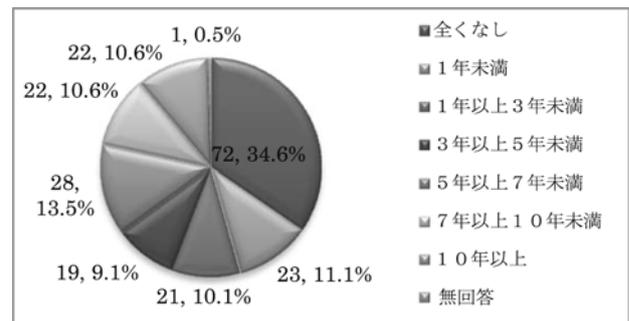


図1. 入学前のピアノ経験年数

(2) 保育・教育現場におけるピアノの必要性

保育・教育現場においてピアノが必要だと思うかどうかを質問した。「とても必要」が165名(79.3%)、「どちらかという必要」が42名(20.2%)、「どちらかという必要ではない」が1名(0.5%)、「全く必要ではない」が0名(0%)となり、99.5%の学生がピアノは必要だと感じている(図2)。これは、2年間の実習において、一度もピアノを弾いていない学生は一名もおらず、また、幼稚園実習Ⅱ(2年6月)に参加してその後筆者の質問紙調査に答えた学生156名中、ピアノを実習期間中に一度も弾かなかった学生は7名(4.5%)しかいなかったことからピアノを現場で弾かなければならないと認識しているのではないかと考えられる。

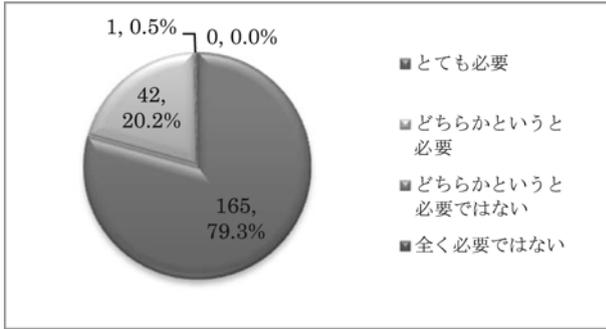


図2. 保育・教育現場におけるピアノの必要性

(3) 実習で音楽活動を行うに当たって困ったこと、反省したこと

結果は表1に示している。最も多かったのは「子どもの様子を見ながら弾くことができなかった」となり、110名(52.9%)であった。次いで「ピアノの練習量が足りなかった」が102名(49.0%)、そして「途中でピアノを弾く手が止まってしまった」が99名(47.6%)であった。本学でピアノレッスンを行う際に最も力を入れていることが弾き歌いであるが、「弾き歌いができなかった」と感じている学生は68名(32.7%)いることがわかった。また、普段学生たちのレッスンをしている際に歌う声が小さいと指導することが多いが、学生自身も実習を通して「声が小さかった」と72名(34.6%)が実感していた。

この結果を短期大学入学前のピアノの経験年数別に見たものを表2に示しているが、割合を見ると、「子どもの様子を見ながら弾くことができなかった」と感じているのは、10年以上のピアノ経験者を除いて、あまりピアノ経験年数に関係なかった。「ピアノの練習量が足りなかった」と感じているのもピアノ経験が7年以上10年未満の学生だけ少ないが、全体的に見るとさほど経験年数に関係がない。ただし「弾き歌いができなかった」に関しては、やはり未経験者や1年未満の学生が突出しており、指導の在り方を考えさせられる結果となった。

験者や1年未満の学生が突出しており、指導の在り方を考えさせられる結果となった。

表1 実習で音楽活動を行うときに困ったこと、反省したこと

項目	人数	割合
子どもの様子を見ながら弾くことができなかった	110	52.9%
ピアノの練習量が足りなかった	102	49.0%
途中でピアノを弾く手が止まってしまった	99	47.6%
ピアノが弾けなかった。間違いが多かった。	85	40.9%
歌詞を途中で言うことができなかった	84	40.4%
知らない曲があった	83	39.9%
声が小さかった	72	34.6%
弾き歌いができなかった	68	32.7%
歌い始めの合図を出すことができなかった	60	28.8%
準備していなかった曲を弾くことになった	54	26.0%
子どもにとって新しい曲を教えるときの教え方が分らなかった	30	14.4%
簡易伴奏にする方法が分らなかった	28	13.5%
リズム遊びなどしたかったが指導方法が分らなかった	22	10.6%
年齢に合った音楽活動が分らなかった	20	9.6%
楽譜のない曲を弾いてと言われた	12	5.8%
楽器の指導方法がわからなかった	8	3.8%
困ったことは特にない	5	2.4%
子どもが音楽活動に興味を示してくれなかった	1	0.5%
その他	1	0.5%

この質問では、ピアノや歌、合図などの技術的な面での反省点を挙げている回答が目立つが、一方で簡易伴奏にする方法が分らなかつたり、リズム遊びの指導法、簡易楽器の指導法、年齢に応じた音楽活動の指導法などがわから

表2 「実習で音楽活動を行うときに困ったこと、反省したこと」のピアノ経験年数別割合

入学前ピアノ経験年数別人数	人数	子どもの様子を見ながら弾くことができなかった人数(割合)	ピアノの練習量が足りなかった人数(割合)	弾き歌いができなかった人数(割合)
全くなし	72	45(62.5%)	47(65.3%)	30(41.7%)
1年未満	23	13(56.5%)	12(52.2%)	11(47.8%)
1年以上3年未満	21	8(38.1%)	11(52.4%)	4(19.0%)
3年以上5年未満	19	11(57.9%)	6(31.6%)	5(26.3%)
5年以上7年未満	28	15(53.6%)	13(46.4%)	6(21.4%)
7年以上10年未満	23	12(52.2%)	3(13.0%)	4(17.4%)
10年以上	21	6(28.6%)	10(47.6%)	7(33.3%)
無回答	1	0(0%)	0(0%)	1(100.0%)
合計	208	110(52.9%)	102(49.0%)	68(32.7%)

なかったりといった、授業を理解した上で実習に臨むべき内容が学生たちに伝わっていないことが見えてきた。特に簡易伴奏に関しては、ピアノレッスンや授業において簡易伴奏の作成方法も伝えるがそれだけでは間に合わないため、あらかじめ筆者が作成した簡易伴奏譜を配布することが多く、学生はそれを見て弾くだけになってしまっている。それによって学生の考える力を身に付けることができている現状が浮かび上がってきた。今後授業を行う上で伴奏付けを教えるための時間を増やしたい。

(4) 授業で役に立った内容

今後の授業の参考とするため、授業を受講してどのようなことが良かったと思ったのかについて質問した(表3)。最も多かったのは「入学前よりピアノが弾けるようになった」ことで170名(81.7%)であった。次いで「幼児曲のレパートリーが増えた」が169名(81.3%)、「ピアノの先生方が熱心に指導してくださった」が133名(63.9%)となり、ピアノに関することが上位を占めた。特にピアノが弾けるようになったと感じる学生が増えることは喜ばしいことである。ただし、「ピアノに関する苦手意識が消えた」という回答が18名(8.7%)にとどまったことは残念である。2年間のレッスンではなかなかピアノを好きになるという所まではないようである。今後少しでも学生の苦手意識を減らすことが課題となる。

表3 音楽に関する授業を受講して良かったこと

項目	人数	割合
入学前よりピアノが弾けるようになった	170	81.7%
幼児曲のレパートリーが増えた	169	81.3%
ピアノの先生方が熱心に指導してくださった	133	63.9%
「うたとあそび」以外の曲も知ることができた	122	58.7%
音楽活動は楽しいと思える	93	44.7%
簡易伴奏をもらうことができた	81	38.9%
歌唱指導法を知ることができた	58	27.9%
簡易伴奏だったら幼児曲を弾けるようになった	56	26.9%
歌や器楽以外の音楽活動について知ることができた	56	26.9%
コードネームが理解できるようになった	49	23.6%
楽器奏法を知ることができた	44	21.2%
わらべうたの遊び方を知ることができた	42	20.2%
簡易伴奏を自分で作れるようになった	24	11.5%
ピアノに対する苦手意識が消えた	18	8.7%
その他	1	0.5%
良かったことは特にない	0	0.0%

(5) 保育・教育現場で音楽活動をするために必要な音楽的技術

保育・教育現場でどのような音楽的な技術が必要だと感じたのかについて質問した。結果は表4に示している。最も多かったのが「弾き歌いができる」で198名(95.2%)となり、ほとんどの学生が実習を通して弾き歌いの技術の必要性を感じたようであった。次いで「子どもを見ながら弾くことができる」が193名(92.8%)、「ピアノで臨機応変に対応する」が160名(76.9%)であった。この「臨機応変に対応する」に関しては、学生に口頭で詳細について質問したところ、多かった回答はテンポに関するものであった。自分で弾くことに一生懸命になり、子どもたちの歌う、もしくは動くテンポに合わせるができず、子どもたちにとって十分な音楽活動を行うことができなかつたことを振り返る声が多かった。また前述の反省点で出たことと関連して「大きな声で歌うことができる」が159名(76.4%)、「自分で簡易伴奏にすることができる」も127名(61.1%)の学生が必要だと感じていることがわかった。

表4 保育現場で音楽活動をするために必要だと感じたこと

項目	人数	割合
弾き歌いができる	198	95.2%
子どもを見ながら弾くことができる	193	92.8%
ピアノで臨機応変に対応する	160	76.9%
大きな声で歌うことができる	159	76.4%
弾き歌いのレパートリーをたくさん持っている	158	76.0%
楽譜がなくても弾けるレパートリーがある	131	63.0%
自分で簡易伴奏にすることができる	127	61.1%
ピアノを上手に弾くことができる	119	57.2%
楽器の扱い方を知っている	91	43.8%
音楽の表現力がある	85	40.9%
コードネームを見て弾くことができる	84	40.4%
その他	1	0.5%
特に必要なことはない	0	0.0%

(6) 今後学びたいこと

今回の調査は、全ての実習を終えた後である、2年後期が始まった時期に行った。残り半年音楽の授業があるため、その半年で身に付けたいこと、学びたいことを尋ねた。最も多かったのはやはり「弾き歌い」で129名(62.0%)、続いて「リトミック」が118名(56.7%)、「リズム遊び」が95名(45.7%)となった(表5)。

リトミックやリズム遊びはこの質問紙調査が終わってからの授業内容として取り扱う予定であった。学生たちの要求と一致していることが分かったため来年度からも積極的に取り入れていきたい。

表5 今後音楽の授業で学びたいこと

項目	人数	割合
弾き歌い	129	62.0%
リトミック	118	56.7%
リズム遊び	95	45.7%
動きに合わせたピアノのレパートリー	66	31.7%
歌唱活動	65	31.3%
マーチング	59	28.4%
音遊び	55	26.4%
楽器奏法・合奏指導法	52	25.0%
わらべうた	47	22.6%
手作り楽器	37	17.8%
音楽活動の指導案作成法	37	17.8%
鍵盤ハーモニカ指導法	32	15.4%
ハンドベル	22	10.6%
和太鼓	21	10.1%
特に勉強したいことはない	2	1.0%
その他	1	0.5%

(7) 2年間のピアノレッスン課題曲の量

最後に、2年間のピアノ課題曲の量についてどのように感じているか質問した。「多い」が9名(4.3%)、「どちらかという和多い」が56名(26.9%)、「ちょうど良い」が138名(66.3%)、「どちらかというと少ない」が3名(1.4%)、「少ない」が1名(0.5%)、無回答が1名(0.5%)となり、圧倒的に「ちょうど良い」が多かった(図3)。

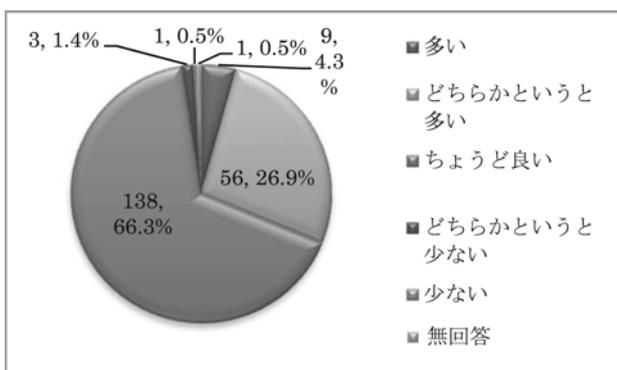


図3 ピアノ課題曲の量について

本学ではピアノの課題曲を1年前期でバイエル18曲、幼児曲10曲、1年後期でバイエル9曲、幼児曲11曲、2年前期でバイエル4曲、幼児曲11曲、2年後期でクラシック曲最低1曲、幼児曲11曲と設定しており、幼児曲のレベルは学期毎に上げている。課題曲を全て終了し、他の曲を弾いた場合は加点するとしている。「多い」と感じている学生

が大多数だと予想していたため、意外な結果となった。

しかしピアノ経験別に見ると、入学前に全くピアノ経験がない学生が「多い」もしくは「どちらかという和多い」と答えたのが72名中36名(50.0%)、1年未満の学生が23名中12名(52.2%)、1年以上3年未満の学生が21名中7名(33.3%)、と高い割合を占めており、3年以上5年未満の学生は19名中3名(15.8%)、5年以上7年未満の学生は28名中5名(17.9%)、7年以上10年未満の学生は23名中1名(4.3%)と減少した。そして10年以上の学生においては21名中1名(4.8%)が「多い」と感じていたが、2名(9.5%)が「どちらかという和多い」、1名(4.8%)が「少ない」と感じており、当然のことであるがピアノの経験年数が関係していることが見て取れた(図4)。

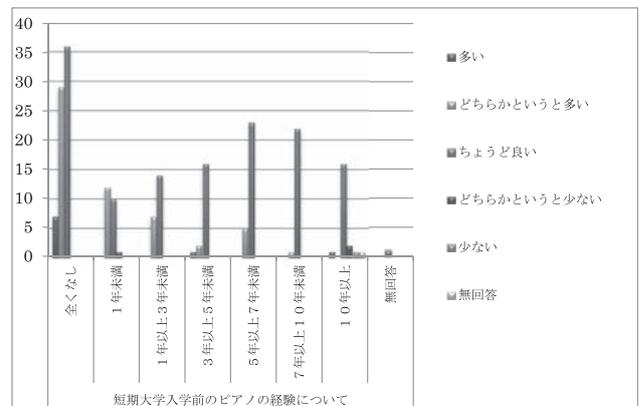


図4 短期大学入学前のピアノ経験年数と課題曲の多さについての意識調査

4 ピアノレッスンにおけるアクティブ・ラーニングの試行

実習において困ったことに関しても、授業を受けて良かったことに関してもピアノ、特に「弾き歌い」のことが挙げられ、学生たちにとって音楽活動を行う上でピアノが欠かせないという意識が根付いているように感じる。しかしピアノの重要性を感じているにも関わらず、学生の練習量が少ないことが筆者にとって悩みである。前述したように学期毎に課題曲を設けているのだが、計画的に進めることが出来ず授業時間のレッスンだけでは間に合わないということが多々起こり、授業時間外にレッスンを行うことが年々増えてきた。平成28年度の前期は1,2年生合計約480名の内、30名程度が時間外レッスンの対象となった。30名の対象者に対し1回30分程度レッスン時間を確保するように努力しているが、1回では終わらない学生も少なくないため2回、3回と行っていると時間外レッスンだけでかなりの時間を要してしまう。このこともあって、課題曲の量について「多い」と感じている学生が多数いるのではないかと考えていたのであった。今回の結果から、多くの学生が2年間

でこれらの曲を履修することは必要だと感じているという事は推測できる。また、学生のピアノに対する意識が低いわけではないことが明確になった。ただ計画的に進めることが難しいだけなのである。

そこで、平成28年度の後期は、ピアノのレッスンを受講している1年生約230名に対し、15回のレッスンの計画を立てるための計画表を配布し、自分で考えて計画を立て、それぞれのピアノ担当教員に提出させるという試みを行っている。曲の難易度がわからず闇雲に計画を立てている学生に対しては、担当教員と一緒に計画を立て直し、達成可能な計画を立てることとした。そして、同様の計画表を学生自身も保有し、学生用の計画表には実際にレッスンを受けた曲を記録させることとした。学生が計画倒れをしないよう、毎回計画表を見てピアノレッスンに臨むように指示し、ピアノ担当教員にもレッスンの度に計画表と実際の進捗の相違を確認してもらうように依頼している。まだこの試みを始めたばかりで結果は出ていないが、ピアノ担当教員からは多くの学生が計画表を目安に練習してくるようになり、計画から大幅に遅れている場合は焦るようになってきたという概ね良いご意見をいただいている。また、学生たちも計画とのずれが生じた場合、次回のレッスンで数曲練習して来たり、空きコマに筆者のところから自らレッスンを受けに来たりするなど意識的に努力している姿が少しずつ見られるようになってきた。これまで、担当教員から次回のレッスン曲を指定されなかった場合、何をしたら良いのかわからなかったからと何も練習してこないということがあったのであるが、最初に計画を立てているためそのようなことが生じることがなくなったことも一つの利点である。

学生が自ら練習計画を立て実践し、計画から遅れた場合に練習量の足りなさを痛感し努力するというこの一連の流れはアクティブ・ラーニングとなるのではないかと考えている。後期の授業が終わった時点でまた学生たちやピアノ担当教員に調査を行い、今後のレッスンの進め方の参考にしたい。そして、レッスン時間外の補講対象者が例年より減るといった効果が見られた場合は、平成29年度からは2年生にも導入し、学生の意識改革に努めていきたい。

引用文献

- 1) 安田寛・長尾智絵 (2010) 「『保育におけるピアノの流行』と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について」奈良教育大学紀要第59巻第1号, p.173
- 2) 宮脇長谷子 (2001) 「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題——養成校へのアンケート調査を通して——」静岡県立大学短期大学部研究紀要15-W号, p.9

参考文献

- ・萩田泉 (2012) 「幼児・初等教育の指導者養成におけるピアノ指導法の研究—初心者学習意欲を高める教授法について—」四天王寺大学紀要第53号, pp.215-232
- ・西海聡子 (2015) 「保育におけるピアノ使用の源流をたどる—明治初期の幼稚園における唱歌とその伴奏楽器について—」東京家政大学研究紀要第55集(1), pp.31-38
- ・岩口撰子 (2016) 「保育者・教員養成課程のピアノ実技の授業研究」相愛大学研究論集, pp.11-23
- ・諸井サチヨ (2016) 「保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察—学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に—」淑徳大学短期大学部研究紀要第55号, pp.81-90

(2016年12月2日 受理)